

カラオケを何度も勧める人 PDCA

伊東和樹は職場の仲間と一緒に二次会のカラオケに来ていた。田舎の医薬品製造所の品質保証部で課長をしている。品質保証部に新しく派遣さんが入り、その人の歓迎会である。伊東はカラオケが大の苦手な人でカラオケに行きたくなかったが、自分のグループに入った派遣さんなので、二次会の費用負担担当として行かざるを得なかった。

同じ部署の安藤美智子はカラオケが大好きなようで、すぐに曲を入れて歌い始めていた。かなり上手かった。自分だけがマイクを占領してはいけないと思ったのか、盛んに周りに歌うことを勧めていた。好きな人はお得意の曲を入れて歌い、その合間に美智子は2曲目、3曲目を入れて歌っていた。伊東は美智子から勧められても断っていた。

伊東以外の皆が1曲は歌った後、美智子はさらに何度も伊東に勧めていた。歌っていないのは伊東だけだった。伊東はカラオケが大の苦手だったが、大きな病気をして少し生き方が変わっていた。苦手なことにチャレンジしてみようと思った。そこでカラオケ教室に少し前から通っていた。人の音が外れているのはわかるが、自分が外れているのは分からなかった。

カラオケ教室では全員で一緒に何度か歌った後、2回から3回後に皆の前で歌うのである。伊東は皆の前で一人で歌うことがとても苦手で恥ずかしかったが、伊東は大病して人として少し成長していた。つまり、「人との比較ではなく、昨日の自分との比較」だと。それに音が外れようが下手だろうが、カラオケ仲間は知らない人ばかりだと。そのカラオケ教室を半年ほど過ぎていて、珍しく先生から「良くなったのでは」と初めて褒められていた。その曲は「すずらん」だった。

伊東は何度も何度も美智子から勧められた。自分からは歌わずに、何度も勧められてようやく歌って上手い人がある。そういう人があるから、美智子はそう思ったのだろう。伊東に言わせれば、もったいぶらずにさっさと歌え！ お前がいるから勘違いされるんだと苦々しくそういう連中を思っていた。しかし、今回はちょっと自信が芽生えて来ていた。そこで「何とか歌えるのではないか」と思って「すずらん」を歌った。しかし、出だしから音が外れた。何度も何度もしつこく進めていた美智子の顔色がさーっと変わったのを、伊東は見逃さなかった。美智子の顔から「しまった。何度も勧めるのではなかった」との思いが読み取れた。美智子にすれば、伊東は職場の上司でもあった。上司に恥をかかせたのである。気まずい雰囲気が広がった……。

やはり音痴はカラオケ教室に行っても良くなるのかと諦めかけていたとき、友だちから「カラオケBOXで練習すればよい」と言われた。伊東は「カラオケBOXは仲間と行くところだ」と思っていた。しかし、一人で行く人が多いとその時初めて知った。

伊東は品質保証の仕事をしていたので、Plan-Do-Check-Actionが大切で特にCheckが大切なことを知っていた。練習してcheckして改善するのが上達のキーになるのはわかって

いたが、いかんせん、自分の歌が外れているのがわからないので、checkしようがなかった。

ところが、その頃、カラオケ機に採点機能が出始めた。歌った後、点数が出るのである。その点数を check として練習していた。苦手でも時間をかけると少しずつ点数が上がっていた。そこで伊東はカラオケ BOX で練習することにした。一人カラオケを 250 時間とカラオケ教室延べ時間 250 時間、合計 500 時間ほど過ぎた頃、不思議なことに気付いた。自分が外れていることが分かるようになったのである。歌っていて、外れている箇所がわかるようになったのだ。当時のカラオケ採点機は点数がでるだけで、今のカラオケ採点機のようにどこがどれだけ外れたかがまだ分からなかった。

伊東はこの体験で大切なことに気がついた。苦手なことは、時間をかけていかなかったということ。時間をかけるとそこそまで上達するということに気付いた。

それまでの伊東は飲み会の場にカラオケ設備があると、カラオケが回ってきて断らないといけないのかと重い気持ちになっていたが、人前で歌う勇気だけは身についた。飲み会の場にカラオケ設備があっても思い気持ちになることはなかった。

美智子に何度も何度も勧められ、恥ずかしい思いをしたことが、一人カラオケにつながり、今となっては美智子に感謝していた。

また、伊東は気付いた。自分は音痴だったけど、歌うのが好きだったということに気付いた。カラオケがストレス発散の場にもなった。